

羽束師志水町遺跡・長岡京跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
二〇〇七―一三

羽束師志水町遺跡・長岡京跡

2008 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人
京都市埋蔵文化財研究所

羽束師志水町遺跡・長岡京跡

2008 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生き続けています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来 1200 年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成 13 年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび道路工事に伴う羽束師志水町遺跡・長岡京跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気付きのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

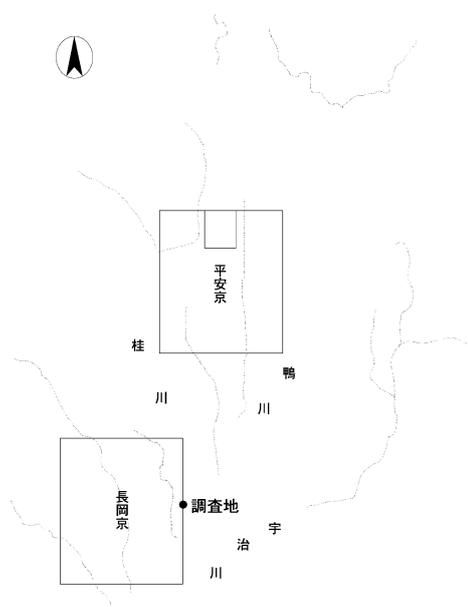
末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げる次第です。

平成 20 年 3 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 羽束師志水町遺跡・長岡京跡
長岡京左京第 523 次調査 (7AN XUK-2)
- 2 調査所在地 京都市伏見区羽束師志水町他地内
- 3 委託者及び承諾者 京都市 代表者 京都市長 榎本頼兼
- 4 調査期間 2007 年 11 月 30 日～ 2008 年 1 月 11 日
- 5 調査面積 約 330 m²
- 6 調査担当職員 木下保明
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図 (縮尺 1 : 2,500) 「久我」・「羽束師」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系 VI (ただし、単位 (m) を省略した)
- 9 使用標高 T.P. : 東京湾平均海面高度
- 10 使用基準点 京都市が設置した京都市遺跡測量基準点 (一級基準点) を使用した。
- 11 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版 標準土色帖』に準じた。
- 12 遺構番号 通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。
- 13 遺物番号 挿図の順に通し番号を付し、写真の番号も同一とした。
- 14 掲載写真 村井伸也・幸明綾子
- 15 基準点測量 宮原健吾
- 16 本書作成 木下保明
- 17 編集・調整 児玉光世・近藤章子



(調査地点図)

目 次

1. 調査経過	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 調査の経過	1
2. 位置と環境	2
(1) 位置と環境	2
(2) 周辺の調査	2
3. 遺 構	4
(1) 基本層序	4
(2) 遺 構	4
4. 遺 物	8
(1) 遺物の概要	8
(2) 土器類	8
(3) 木製品	9
(4) その他の遺物	10
5. ま と め	11

図 版 目 次

図版1	遺構	1	1区北半全景（北から）
		2	1区南半全景（北から）
図版2	遺構	1	2区北半断割り状況（北から）
		2	2区南半全景（北から）
図版3	遺物	1	出土土器
		2	木製品
		3	石製品・金属製品

挿 図 目 次

図1	調査前全景（北から）	1
図2	作業風景	1
図3	調査区および周辺の調査位置図（1：2,500）	2
図4	調査区配置図（1：750）	4
図5	1区西壁断面図（1：100）	5
図6	1区北壁断面図（1：100）	6
図7	2区西壁断面図（1：100）	6
図8	調査区平面図（1：300）	7
図9	出土土器実測図（1：4）	9
図10	木製品実測図（1：4）	10
図11	その他の遺物実測図（1：4）	10

表 目 次

表1	周辺調査一覧表	3
表2	遺構概要表	4
表3	遺物概要表	8

羽束師志水町遺跡・長岡京跡

1. 調査経過

(1) 調査に至る経緯

調査地は、京都市伏見区羽束師志水町地内に位置する。この調査は、羽束師橋関連道路(第一工区)埋蔵文化財発掘調査である。調査地は古代末期から中世にかけての集落遺跡である羽束師志水町遺跡、また、長岡京左京五条四坊十六町の東京極の推定地に隣接している。そのため、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の指導のもとに、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が委託を受けて調査を担当した。

(2) 調査の経過

調査地は、水路を境に南北2箇所に分れるため、北部を1区、南部を2区と命名して調査を実施した。場内で掘削土を処理しなければならなかったため、1・2区とも南北の2区画に分けた。2007年12月4日の1区北半の重機掘削から調査を開始し、2区北半→2区南半→1区南半の順に実施し、2008年1月11日に調査を終了した。

調査中、京都市文化財保護課の現地指導・検査を、2007年12月4日・12月11日・12月19日・12月25日、2008年1月10日の計5回受けた。また、契約時の特記仕様書に基づき鈴木久男(京都産業大学教授)、高正龍(立命館大学教授)を指導委員とする調査検証委員会を設置し、鈴木教授に12月12日・12月28日、高教授に12月26日の計3回現地で指導を受けた。



図1 調査前全景(北から)



図2 作業風景

2. 位置と環境

(1) 位置と環境

調査地は、現在の羽束師志水町の集落北西部に立地し、北側には府道79号・伏見柳谷高槻線（外環状線）が通り、西側を西羽束師川支流が南流している。地理的にみて、桂川右岸の後背湿地に立地し、付近では水田が営まれている。当地は、古代末期から中世にかけての集落跡である羽束師志水町遺跡にあたり、長岡京左京五条四坊十六町の東京極の隣接地でもある。

(2) 周辺の調査（表1、図3）

調査地の周辺では、外環状線に伴う発掘調査が実施され、羽束師志水町遺跡の関連遺構として、平安時代後期から江戸時代中期の建物跡・柱穴・井戸・土坑・池・溝・濠・墓跡などを検出している。主な調査地点と調査の概要を表1と図3に示して、概略を述べる。

今回の調査地に隣接したNo.1の調査では、調査区の西側3分の2は近世以降の湿地堆積で、遺構は残りの東側で検出されている。検出された遺構は、平安時代後期の柱穴、室町時代の溝・東西の濠・

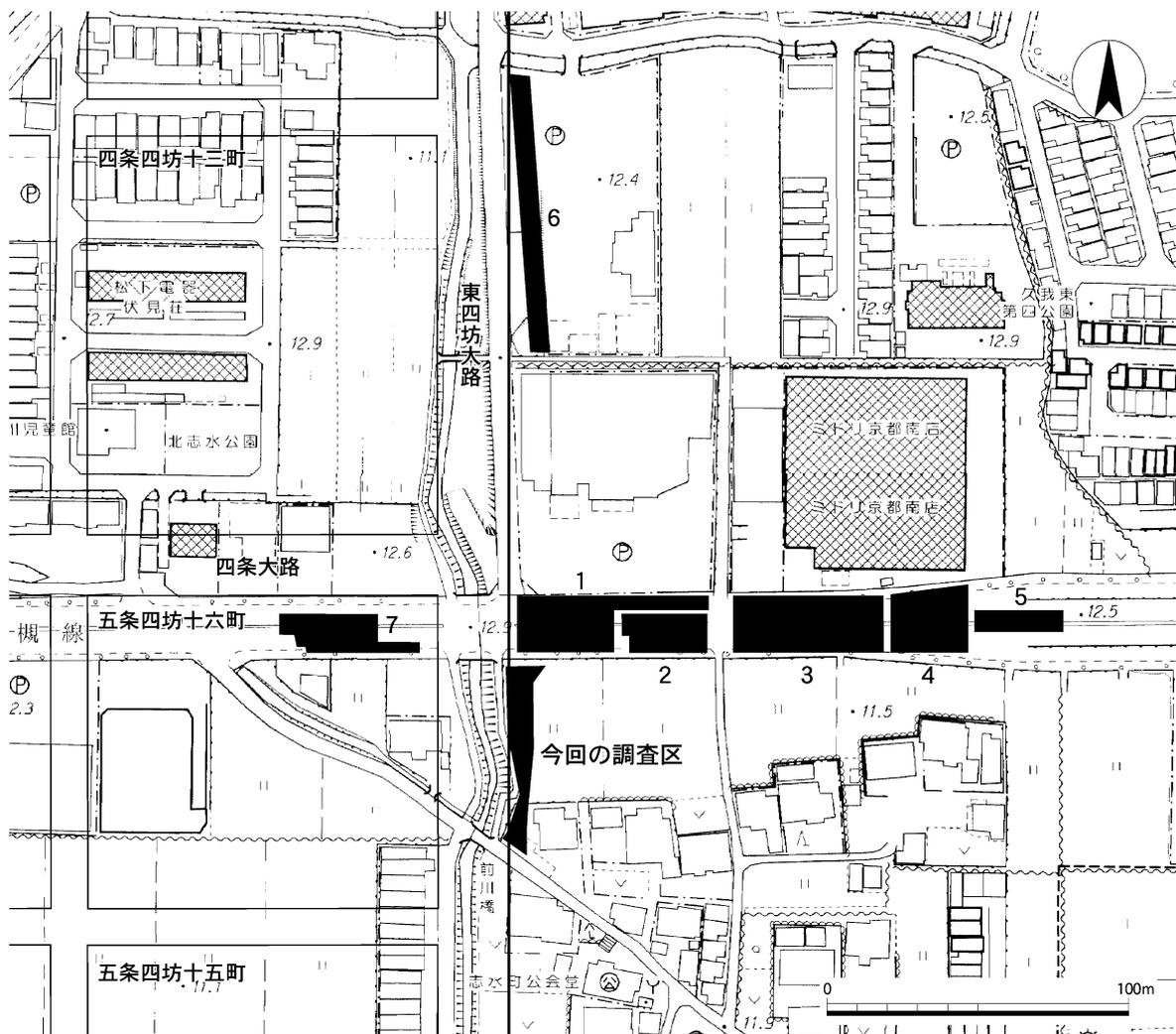


図3 調査区および周辺の調査位置図（1：2,500）

土壙墓7基（内5基は火葬墓）、江戸時代前期の柱穴内に礎石を据えた建物・土坑・溝、江戸時代中期の南北方向の畦畔・溝である。土師器、瓦器、国産陶磁器、輸入陶磁器、瓦などが出土している。

No.2の調査では、平安時代後期から鎌倉時代の柱穴・溝・土坑、室町時代の条里地割にのった溝・火葬墓・柱穴、桃山時代の建物・井戸・土坑（土器溜り）を検出した。

No.3の調査では、平安時代後期の柱穴、室町時代中期の建物跡・墓跡（土壙墓・火葬墓）・井戸・土坑・濠、桃山時代から江戸時代前期の建物・土壙墓・土坑・溝、江戸時代中期の土壙墓溝・畦畔などが検出されている。桃山時代の墓跡は、一辺4mの低い方形の壇上に8基の蔵骨器と甕が埋納されていた。

No.4の調査では、平安時代後期から鎌倉時代の建物・井戸・池・溝、室町時代の柱穴・土坑を検出した。

No.5の調査では、集落に関する遺構は検出されずに湿地堆積となる。

No.6の調査は、今回の調査と同じく羽束師橋関連道路建設工事に伴う試掘調査で、トレンチを4箇所設定して調査を実施した。その結果、時期不明の湿地状堆積土層を検出している。

長岡京域に位置するNo.7の調査では、奈良時代から長岡京期の柱穴群・溝、室町時代の流路を検出している。

表1 周辺調査一覧表

No.	調査方法	調査面積(m ²)	調査年度	主な遺構	文献
1	発掘	988	1987	平安時代後期の柱穴、室町時代中期の溝・濠・土壙墓・火葬墓、桃山時代～江戸時代前期の建物・土坑・溝、江戸時代中期の溝・畦畔	『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
2	発掘	392	1988	平安時代後期～鎌倉時代の柱穴・溝・土坑、室町時代の溝・火葬墓・柱穴、桃山時代の建物・井戸・土坑	『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
3	発掘	734	1989	平安時代後期の柱穴、室町時代中期の溝・濠・土壙墓・火葬墓、桃山時代～江戸時代前期の建物・土壙墓・土坑・溝、江戸時代中期の土壙墓・溝・畦畔	『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
4	発掘	560	1988	平安時代後期～鎌倉時代の建物・井戸・池・溝、室町時代の柱穴・土坑	『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
5	発掘	89	1989	平安時代末期～鎌倉時代の湿地	『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
6	試掘	87	2000	時期不明の湿地	『平成12年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
7	発掘	274	1988	奈良時代から長岡京期の柱穴・流路・溝、室町時代の流路・溝	『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』

※ 調査No.は図3の番号と対応する

3. 遺 構

(1) 基本層序

1区の基本層序 (図5・6)

1区の基本層序は、現代の水田耕作土・床土の下に暗オリーブ灰色粘土・オリーブ灰色粘土・オリーブ灰色シルトが、地表下約 1.0m まで堆積する。これらの土層は、中世から近世の水田耕作土と思われ、層中に褐色の酸化したマンガンを粒状に多く含んでいる。また、水田耕作土に伴う畦畔と思われる高みが認められる箇所がある。以下は、灰色シルトを中心とする土層が水平に重なる湿地状堆積で、水生植物の根跡が多く残っている。湿地堆積の上面に、樹木の立枯れ痕跡が認められる箇所がある。

2区の基本層序 (図7)

2区の基本層序は地表下約 1.0m までが現代の整地層で、次に近・現代の水田耕作土と考えられる暗オリーブ灰色シルト、以下は粘土層を中心とした江戸時代後期から明治時代の溝もしくは池の堆積層となる。

(2) 遺 構 (図8、図版1・2)

調査は、重機によって1区では長岡京期の遺構面と認識した湿地堆積の上面、一部ではそれ以下まで掘り下げて遺構検出を実施した。2区南半部の調査では、近・現代の水田耕作土と考えられる暗オリーブ灰色シルトを長岡京期の遺構面と認識して調査を開始した。しかし、断割り作業の結果、この層の下に江戸時代の溝が存在することを確認した。

検出した遺構はすべて江戸時代後期から明治時代の遺構である。断面観察によって確認した2～3層の水田耕作土も、ほとんど遺物を含まず、時期を決定するのは難しいが、中世から近世にかけて営まれたものと思われる。

溝1 1区北半の東端で検出した、南北方向の溝である。西肩のみの検出であるが、長さは25.5m以上、幅は5.5m以上、深さは1.55mである。現代の床土直下で検出した。埋土の上部は黄褐色系の砂質土を中心とした土層で、この溝を廃棄する時に埋められた土層であると思われる。

表2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
江戸時代 ～明治時代	溝1～3・5、土坑4	

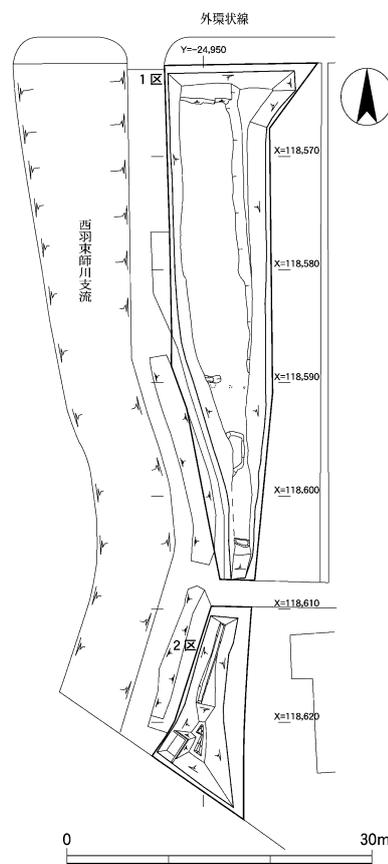


図4 調査区配置図 (1 : 750)

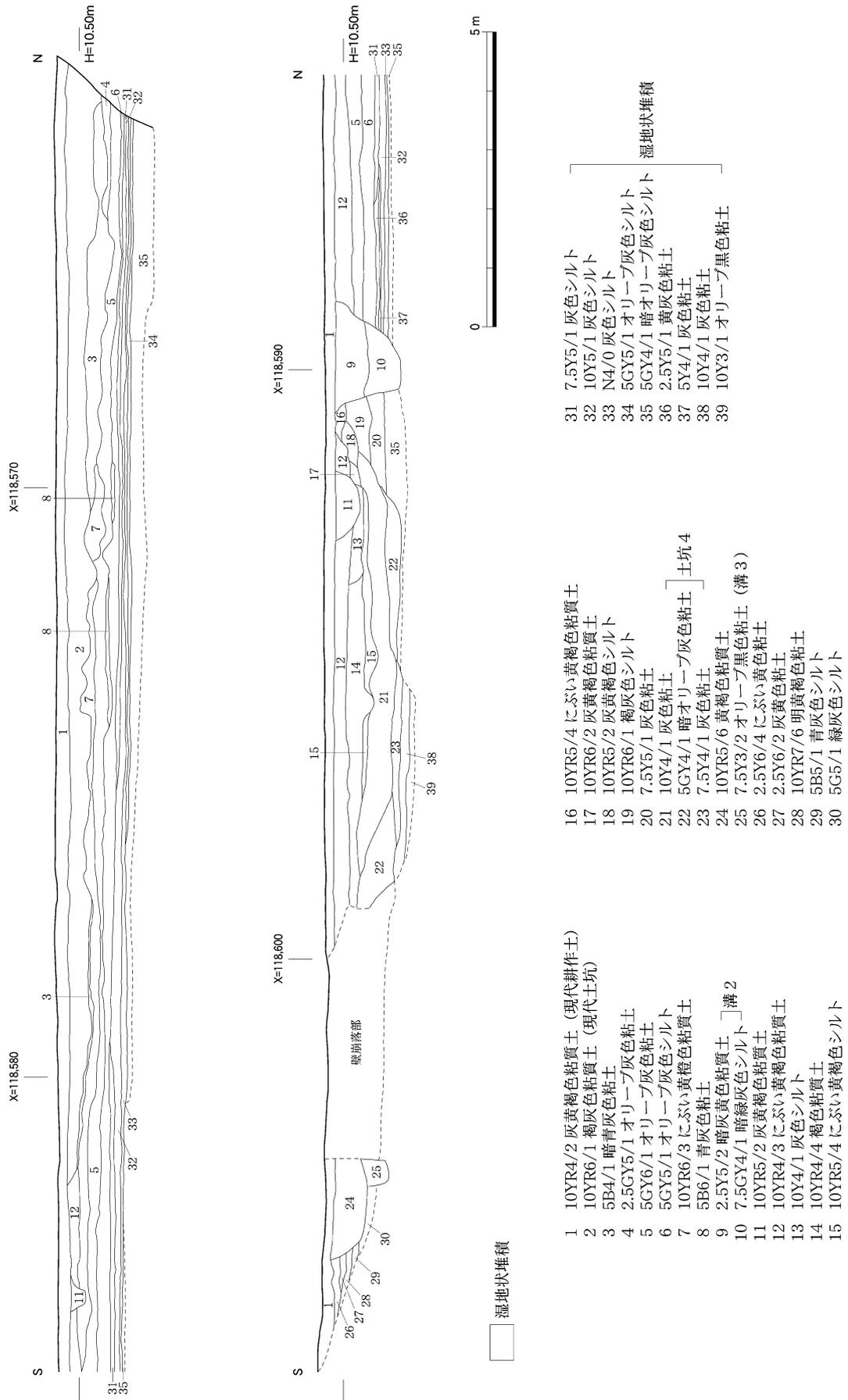


図5 1区西壁断面図(1:100)

下部は、暗緑灰色系の粘質土を中心とした土層で、溝が機能していた時の堆積土である。耕作地

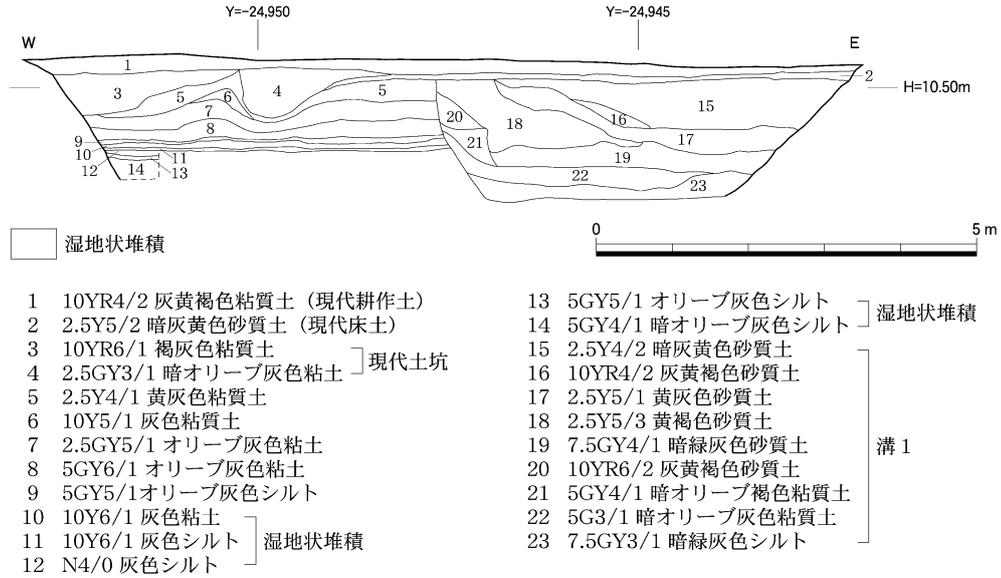


図6 1区北壁断面図(1:100)

に伴う灌漑用水路の可能性が考えられる。江戸時代後期から明治時代の遺物が出土し、土師器の皿、

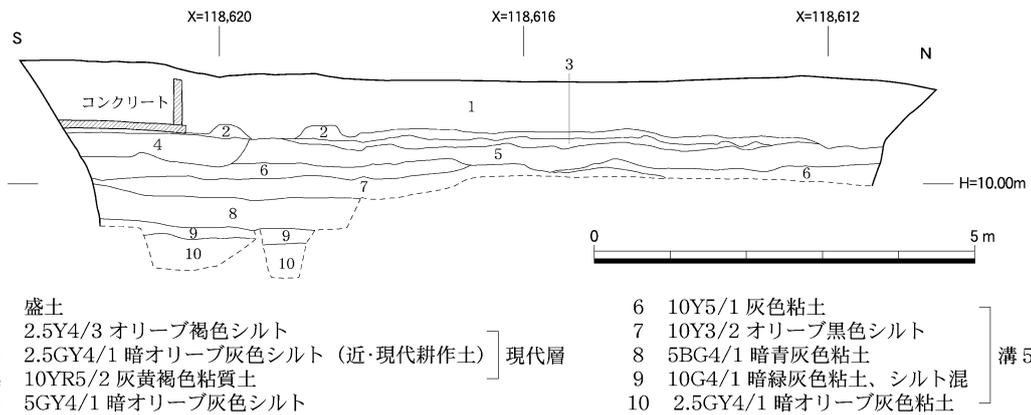


図7 2区西壁断面図(1:100)

土師質土器の胞衣壺、京・信楽系施釉陶器の皿・壺、石製品の硯、瓦などがある。

溝2 1区南半の北部で検出した、東西方向の溝である。現代の耕作土直下で検出した。幅は約2.0m、深さ1.1mである。埋土は上下2層に分れ、上層は暗黄灰色粘質土、下層は暗緑灰色シルトである。江戸時代後期から明治時代の遺物が出土し、土師質土器、染付の椀、棧瓦、木製品などがある。

溝2の南側に水田耕作土に伴うと思われる畦畔が継起的に造られており、溝2も畦畔の造成に併せて作り替えられてきたものと思われる。この畦畔がなんらかの土地区画の規準となっていた可能性が考えられる。

溝3 1区南端で検出した、東西方向の溝である。上部を近・現代の土坑に破壊されている。幅は0.5～0.7m、深さは0.45mで、埋土はオリーブ黒色粘土である。遺物は出土していないが、江戸時代後期から明治時代の遺構と思われる。

土坑4 1区の南半部、溝2の南側で検出した。機械掘削時にほぼ完掘状態で、わずかに底部

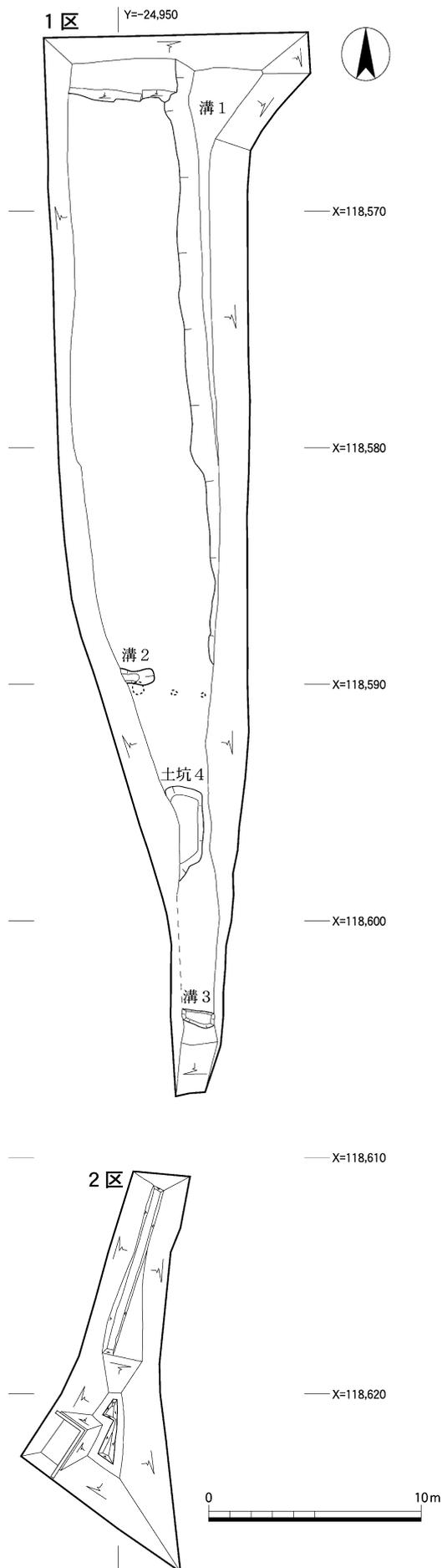


図8 調査区平面図 (1 : 300)

を残すのみであった。現代の耕作土下の2層の耕作土(図5-12・14層)下で検出した。断面の観察によれば、南北幅約7.7m、深さ0.7mである。埋土は灰色粘土と暗オリーブ褐色粘土を中心とする。遺物は木製品の加工木・板材が出土している。江戸時代の遺構と思われる。

溝5 2区で溝もしくは池状の堆積土を検出した。堆積土は2区全体で認められ、一部杭列を確認した。規模・形態は不明で、地表下約2.8mまで掘り下げたが、底部は確認できなかった。埋土は大きく5層に分れ、上から灰色粘土、オリーブ黒色シルト、暗青灰色粘土、暗緑灰色粘土、暗オリーブ灰色粘土が堆積している。湛水した状況下で沈殿堆積したと考えられ、カラス貝・シジミなどの殻が多く含まれている。最上層の灰色粘土は、この溝を廃棄する時に埋められた土層であると思われる。1区で検出した溝1と堆積層が異なるため、別の遺構と認識した。江戸時代後期から明治時代の遺物が出土し、土師器の皿、土師質土器の胞衣壺、京・信楽系施釉陶器の椀・壺、堺・明石系焼締陶器の播鉢、肥前磁器染付の椀・皿・壺、木製品の下駄・曲物の底・加工木などがある。

4. 遺物

(1) 遺物の概要（表3）

今回の調査で出土した遺物は、コンテナ 12 箱で内 3 箱は木器である。大半が江戸時代後期から明治時代の遺物で、土器類・瓦類・木製品・金属製品・石製品などが混じる。

平安時代の遺物は後世の遺構から出土しており、須恵器の甕、灰釉陶器の壺などがある。

室町時代の遺物も後世の遺構から出土しており、瓦器の椀がある。

江戸時代後期から明治時代の遺物は溝・土坑・遺構検出中に出土しており、土師器の皿、土師質土器の炮烙・胞衣壺、軟質施釉陶器の皿、京・信楽系施釉陶器の椀・壺・甕、堺・明石系焼締陶器の播鉢、肥前磁器染付の椀・皿・壺、瀬戸・美濃の磁器染付、九谷の磁器赤絵、木製品の下駄・曲物・加工木・板材・杭、金属製品の煙管、石製品の砥石・硯、瓦類の棧瓦・丸瓦・鬼瓦などがある。

(2) 土器類（図9、図版3）

遺構検出中出土の土器（1～7） 1は小型の土師器皿である。ナデによる調整を施し、色調は灰色を呈する。

2・3は施釉陶器である。2は唐津の皿で、緑白色の釉が高台を除いて施されている。ロクロ成形で、内底面に目跡が残る。3は京・信楽系の椀で、上絵が描かれている。

4～6は肥前磁器である。4は染付の仏飯器で、高台部は露胎である。杯部外面に花卉文を描く。5は青磁染付の皿である。口縁部内部に青磁の釉がかかり、内底面には二重圏線の中に鳥文を描く。外面に梅樹繫、高台内部に四角の内に文字を描く。6は染付の椀で、外面に網目文、口縁部内面に青海波文、内底面に渦文を描く。

7は堺・明石系焼締陶器の播鉢である。

2は江戸時代前期、他は江戸時代後期の土器である。

溝1出土の土器（8～12） 8は軟質施釉陶器の皿で、半環状の把手が付く。内面全体と外面に

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代	須恵器、灰釉陶器				
室町時代	瓦器				
江戸時代 ～明治時代	土師器、土師質土器、焼締陶器、施釉陶器、軟質施釉陶器、磁器、木製品、石製品、金属製品		土師器3点、焼締陶器1点、施釉陶器2点、軟質施釉陶器1点、磁器9点、木製品4点、石製品2点、金属製品1点		
合計		13箱	23点（1箱）	10箱	2箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より1箱多くなっている。

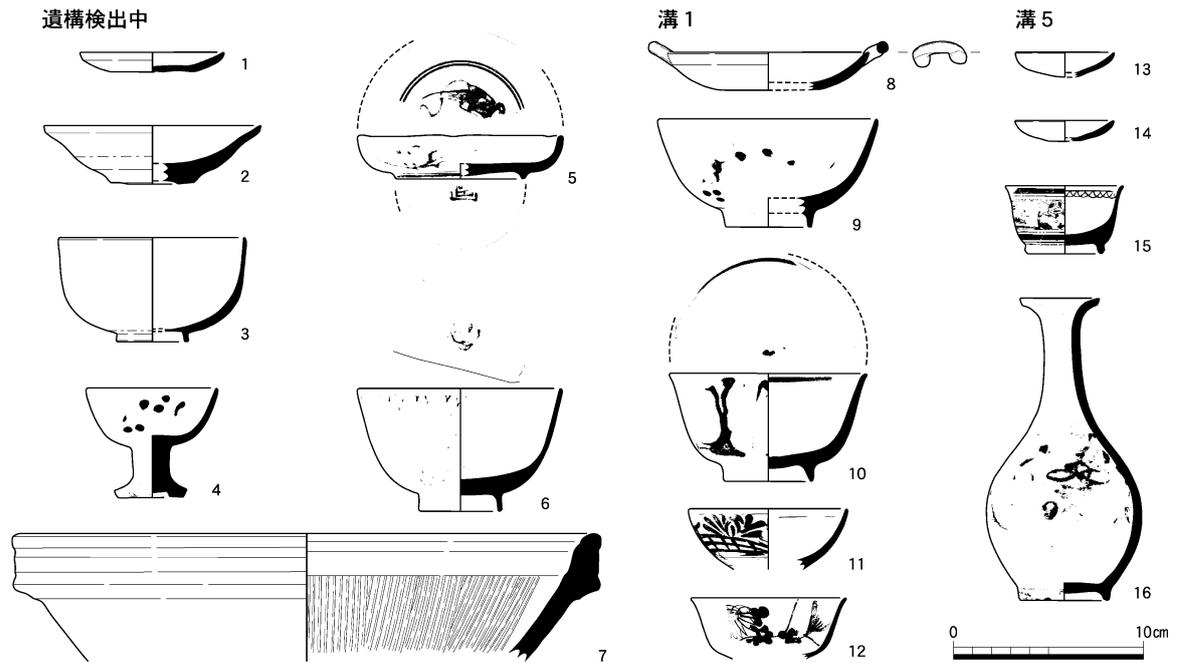


図9 出土土器実測図（1：4）

筆で線状に淡緑灰色の釉が施されている。

9～12は磁器である。9は九谷の磁器赤絵の小椀で、赤絵と緑彩で外面に垣根と草花文を描く。10は瀬戸・美濃の釉下彩の磁器の小型の端反り小椀である。外面に鉄釉と銅緑彩で菊を描く。11は肥前磁器の染付の椀である。「くらわんか」と呼ばれる粗製の椀で、外面に梅樹を描く。内底面は蛇の目釉剥ぎである。12は瀬戸・美濃磁器の染付の端反りの椀で、外面に草花文、内底面に花卉文を描く。

8・11・12は江戸時代後期、9は明治時代前半、10は明治時代末年の土器である。

溝5出土の土器（13～16）13・14は手捏ね成形の小型の土師器皿で、指頭圧痕を明瞭に残す。13の色調は灰白色、14は浅黄色である。

15は九谷の磁器赤絵の端反り小椀である。外面を8区画に分け、船・花卉・家などを描いている。

16は染付の壺である。卵形の体部からほぼ直線的に頸が長く伸び、口縁部は外反し、端部は外面に面をもつ。高台端部に重焼の痕跡が残る。外面に花卉文を描く。

15は明治時代前半、他は江戸時代後期の土器である。

（3）木製品（図10、図版3）

下駄(17) 小型の小判形の連歯下駄である。歯は下端が「ハ」の字形に広がり台の側面に張り出す。前緒穴は台のほぼ中央にあり、後歯の前に後緒穴がある。長さ13.6cm、幅7.3cm、高さ3.3cmである。溝5から出土した。

板材(18・19) 18は長さ18.1cm、幅7.3cm、厚さ1.2cmの長方形の板材である。長辺側に沿って裏面に貫通する9対の孔が開けられている。対になる孔間に細くて浅い線刻が認められるが、これは孔の位置の確認のために刻まれたものと思われる。短辺側にもそれぞれ2・1箇所の穴が

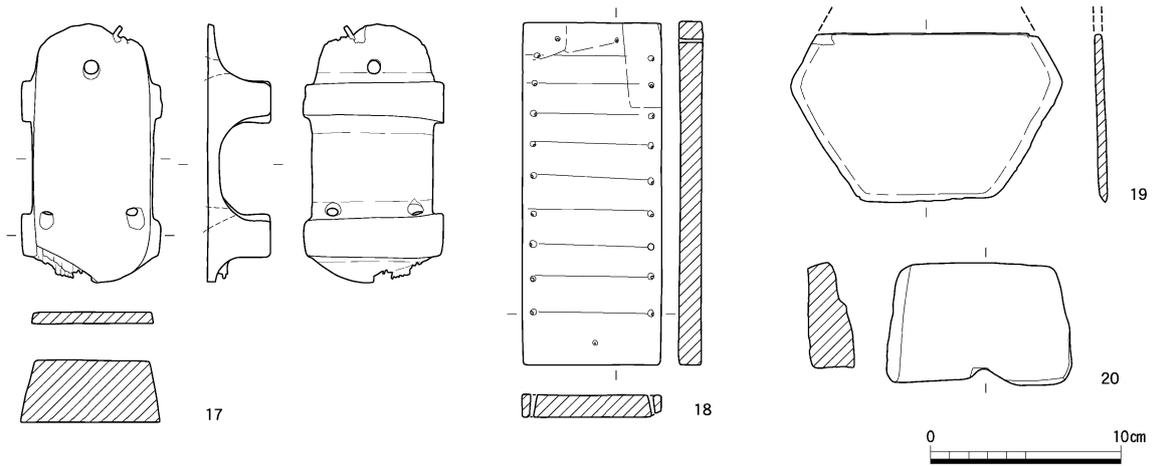


図10 木製品実測図（1：4）

設けられるが、裏面には届いていない。用途は不明である。19は一辺約7.0 cmの六角形の板材で、幅14.3 cm、厚さ0.45 cmである。端面は削られて断面三角形を呈する。曲物の底の可能性はある。

18は土坑4、19は溝5から出土している。

加工木（20）上辺8.1 cm、下辺9.2 cm、高さ5.4 cmの台形の加工木である。厚さは2.3 cmで、下辺の中央部に三角形の抉りを入れている。用途は不明である。土坑4から出土している。

（4）その他の遺物（図11、図版3）

その他の遺物には石製品と金属製品がある。

砥石（21）粘板岩製の棒状の砥石である。端面以外の長軸方向の4面が使用されている。かなり使用されたものとみられ、中凹みになっている面がある。遺構検出中に出土した。

硯（22）粘板岩製の長方形を呈する小型の硯である。溝1から出土した。

煙管（23）真鍮製の火打付煙管の雁首である。椀形の火皿をもち、脂返しは大きく湾曲し、首部につながる。溝5から出土している。

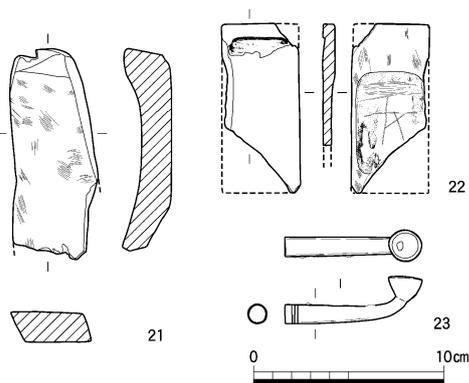


図11 その他の遺物実測図（1：4）

5. ま と め

今回の調査によって検出した遺構は、江戸時代から明治時代の溝・土坑のみであったが、調査地の土層の堆積状況、周辺で実施された調査の成果を参考にして、調査地の歴史の変遷を考察してみる。

調査地は桂川右岸の後背湿地に立地し、中世に至るまで湿地状堆積が継続していたと思われる。したがって、当地は長岡京左京五条四坊十六町の東京極の隣接地であるが、長岡京期においても湿地であり、長岡京の造営は及ばなかったと考えられる。中世になって、水が退いて陸化した後、水田として利用されるようになる。その間、湿地が陸化する過程で樹木が生えていた時期があり、水田を造成するにあたって、それらの樹木を伐採したものと思われる。

中世・近世を通じて水田は維持され、江戸時代には調査区の東端に南北方向の灌漑用水路（溝1）が造られる。

明治時代の末年になって、周辺の耕作地の改変が実施されたとみられ、灌漑用水路（溝1）は埋められてしまう。調査区の西側を流れる現代の西羽東師川支流に付け替えられたものと思われる。灌漑用水路を埋めた上に、新たに水田を造成し、現代に至っている。

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	はづかししみずちょういせき・ながおかきょうあと							
書名	羽束師志水町遺跡・長岡京跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2007-13							
編著者名	木下保明							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2008年3月14日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はづかししみずちょう 羽束師志水町 いせき 遺跡・ ながおかきょうあと 長岡京跡	きょうとしふしみく 京都市伏見区 はづかししみずちょう 羽束師志水町 ほかちない 他地内	26100	1198	34度 55分 51秒	135度 43分 37秒	2007年11月 30日～2008 年1月11日	約330m ²	道路工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
羽束師志水町 遺跡・ 長岡京跡	集落跡	平安時代			須恵器、灰釉陶器			
	都城跡	室町時代			瓦器			
		江戸時代 ～明治時代	溝、土坑		土師器、土師質土器、 焼締陶器、施釉陶器、 軟質施釉陶器、磁器、 木製品、石製品、金属 製品			

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-13
羽束師志水町遺跡・長岡京跡

発行日 2008年3月14日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
発行

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1

〒 602-8435 TEL 075-415-0521

<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地

〒 604-0093 TEL 075-256-0961